特集：魔法の習慣７

第１章
可能性に挑戦し続けるチームを築くために

劇団かかし座　代表　後藤 圭さん

梅津　勝明
東京都中小企業診断士協会城西支部

「人間の可能性を伝えたいんですよ。こんな楽しいものができたよ，こんな素晴らしいものができたよ，ということを目撃してもらいたい。人間の技としての影絵ですから」

こう語ったのは，劇団かかし座代表の後藤圭さんである。温和な表情の中にも力強さが感じられた。

劇団かかし座は，日本で最初に誕生した影絵専門の劇団だ。1952年の創立以来，独自の手法で影絵の世界を拓き，多くの作品を生み出してきた。影絵劇の上演だけでなく，テレビ・映画・ミュージックビデオなどの映像作品への出演・指導・監修，出版物・展示物の影絵制作・作品提供など，幅広く活動している。

影絵で観客や鑑賞者を魅了し続ける，劇団かかし座座長の後藤さんにお話を伺った。

劇団かかし座「星の王子さま」より

１．状況に応じた影絵パフォーマンス

この取材を行うにあたり，公演「星の王子さま」を観させていただいた。その際，子どもだけではなく，大人も楽しめる内容だと感じた。そこで，どのようなお客様に観ていただきたいのかを後藤さんに尋ねたところ，このような答えが返ってきた。

「影絵っていうと，子どもを対象としたものに見られやすいんですよ。中身は全然関係なく，ですね。舞台劇で児童劇というと子ども向けを指すんですが，人形劇や影絵劇という言葉には本来，子ども向けという意味は含まないんですよね」

世間との認識のギャップを口にする。その表情には，苦悩の色が浮かんでいた。

「うちには小さい子ども向けの作品もありますが，ハイティーンから上を意識して作った作品もある。小さい会場の仕事なのか，市民会館の仕事なのか。ファミリーの仕事なのか，学校の団体鑑賞の仕事なのか。どんな会場なのか，誰に観ていただくのか，に応じた作品を提供するのがうちのやり方なんです」

世間の多くが「影絵劇＝子ども向け」と認識しているからといって，ターゲットを子どもだけに絞ることはしないのが劇団かかし座のスタイルだ。後藤さんの言葉からは，劇団かかし座の熱く，強い，そしてブレずに貫く力が伝わってきた。

劇団かかし座がハイティーンから上の顧客層を意識して作った作品の１つに，全編手影絵のパフォーマンス「HAND SHADOWS ANIMARE（ハンド・シャドウズ・アニマーレ）」がある。ANIMARE（アニマーレ）とは，ラテン語で“生命を吹き込む”という意味で，手と体だけでさまざまな形を作り出すシルエットショーである。パフォーマーの手によって生命を吹き込まれた影たちが物語を繰り広げるこの作品は，国内外で高く評価されている。

手影絵パフォーマンスは，劇団かかし座の強みの１つである。この「HAND SHADOWS ANIMARE」を作るに至った経緯を，後藤さんはこう語った。

「いまから四半世紀くらい前に，ある先生がおっしゃったんです。『君たちは影絵劇団なのに，なぜ手影絵をやらないのか。手影絵には，ものすごく豊かな可能性がある』と。当時は，手影絵といっても，カニや鳥など数種類しか知らなかったし，それが一編のステージになるとは考えていませんでした。手影絵は何かの形で続けようと，20年以上少しずつ少しずつやってきて，あるときに『海外の公演はどうだろう。手影絵でやってみる価値はあるね』ということで誕生したんです」

後藤さんは目を輝かせ，前のめりで語っていた。その表情からは，影絵が本当に好きで純粋に楽しみたいという気持ちがあふれ出ていた。この気持ちがなければ，手影絵の可能性を信じること，追求し続けることはできなかっただろう。そして，この作品を生み出すこともおそらくできなかっただろう。シンプルだが，ブレることのない「影絵が好き」，「影絵を楽しみたい」という気持ちが，劇団かかし座を支える原動力なのではないだろうか。

そのほかにも，手影絵を効果的に使った作品は次々と生み出されている。

「動きのしなやかさ，細やかさを出せる手影絵の表現は，うちの影絵の１つの可能性として大事にしていきたいですね」

熱く語る後藤さんは，まるで１つのことに熱中する，好奇心にあふれた少年のようだ。

また，岐阜県の下呂温泉・合掌村には，常設劇場「影絵昔話館しらさぎ座」を置いている。

「下呂の場合は，常設影絵劇場といっても自前の小屋ではなく，招かれて行って下呂の昔話を題材としてやっています。観客は観光客の皆さん，大人の方が圧倒的に多い。夏休みはお子さんも多いけれど，半分を超えることはまずない。その方々が観て，素晴らしいと感じるものでないといけないんです。必ずしも，かかし座的にこれが良いんだ，というわけではないんですよね」

自分たちの影絵劇には自信を持っている。しかし，それを押しつけても観客には伝わらないかもしれない。どこで誰が観るのか，誰を楽しませたいのか，この状況の中で何をすることがベストなのか，を常に意識した作品づくりを劇団かかし座は貫いている。

２．受け継がれるアメニモマケズの精神

劇団かかし座は後藤さんの父親が創業し，後藤さんは自宅と稽古場が一緒という環境に育つ。後藤さんは，あまりに身近にあった影絵ではなく，音楽の道へ進もうと音楽大学に進学するが，その矢先に父が逝去。後藤さんは跡を継いだ。そのときは，会社を存続させようという思いしかなかったという。それまで，影絵について父親と話したことがほとんどない中での決断だった。作品の質を落とさないことや，影絵が活きる表現手法を考えた。そして，いつしか影絵に夢中になっていた。

劇団かかし座の名前の由来を尋ねてみた。

「創立のとき，母は父から『かかし座にしたよ』と言われたそうです。父は宮沢賢治が大好きでしたので，そこからの連想だと思います。『雨にも負けず，風にも負けず，かかしがじっと立っているようなイメージで，“かかし座”という名前にしたのでしょう』と母が言っていました」

“かかし座”には，じっと耐えるという意味だけでなく，ブレない力強さのような，宮

沢賢治の詩の“アメニモマケズ”の精神を持つという意味もあるのかもしれない。この精神は，いまも息づいているように感じる。愚直にコツコツと影絵劇を追求してきたからこそ，今日の発展を遂げることができたのだろう。

３．素晴らしい表現ができた仲間を評価

多くの人々を魅了する空間を作り上げている劇団かかし座。そこにはチームワークが不可欠だろう。後藤さんに尋ねたところ，顔をほころばせた。

「こういう仕事って，給料が安いじゃないですか。だから，お金だけじゃないと思っている人しかいませんよ，うちには。お金のほうが大事だと思ったら，もうちょっと違う仕事をすると思います」

後藤さんと同じように，「影絵が好き」，「影絵を楽しみたい」というメンバーでチームが構成されているのだろう。このことは，チームワークに必要なことと考えられるが，話を続けるうちにこんなことも語ってくれた。

「公平に評価されることが，とても大事だと思いましてね。演劇には，技量の差がわかりにくい部分があるんです。スポーツだと，タイムを計れば序列がつき，リーグ戦やトーナメント戦をやれば，運不運はあっても勝ち負けがつきますよね。劇団という組織にも，そういう機会がないといけないだろうと。努力して素晴らしい表現を手に入れた仲間は，やっぱり評価しないといけない。

そこで，社内的に検定試験をするんですよ。歌や手影絵，身体基礎能力など，このチームでやっていくのに必須と思われるスキルの試験を，年２回行うんです。歌は外部の先生にお願いして，手影絵は自分たちが審査をして，全員に点をつける。そうすると，同じ手影絵をやっていても，『こういうのが評価が高いんだな』，『歌がこれくらいできるとソロで歌えるんだな』，『これくらいまでできないと，舞台には出られないんだな』などと各々が感じる。僕らの仕事はお客様に喜んでいただくためにやっているわけですから，『そのためにはこれくらいの技量が必要だ』とはっきりしたほうがいいんです」

わかりにくい評価基準を明確にすることで，評価されるメンバーとされないメンバーが生まれる。ただし，劇団の方向性を理解し，努力を重ね，技能を身につけたメンバーは必ず評価される。これを続けることにより，個々の意欲を高めるだけでなく，劇団員全員の目指す方向が定まってくるのではないだろうか。検定試験制度が，チームワークを生み出す大きな要因になっていると感じた。

また，それ以外の効果もあるという。

「お互いの技術や基礎力をじっくりと見合うことは普段はなかなかないので，評価されている人の演技を見て，『自分もこうしてみよう』と考えるきっかけにもなるのかな」

身近に手本が存在することで，個々の目標が明確になり，能力向上を促進することにもつながっているのだろう。

劇団かかし座のチームワークを支えている要素には，こんなものもあると感じた。オンとオフのメリハリである。

「舞台に関することはかなり教育しますよ。でも，そのほかの日常のことは言いませんね。ただ，忘年会だけはかなり盛大にします。皆で飲み物や食べ物を持ち寄ってやるんですが，演芸大会みたいになっちゃって。こういうことは大事にしていますよ」

このオンとオフのメリハリにより，お互いが良い距離感を保ち，一体感が醸成されているのではないだろうか。

４．全部門での身体表現ワークショップ

劇団かかし座には３つの部門がある。舞台部と美術部，そして企画営業部だ。

驚いたのが，３つの部門すべてで身体表現ワークショップを行うことだ。体を動かし，演じる舞台部だけが身体表現ワークショップを行うのでは，というイメージが覆された。

「企画営業部は基本的に営業ですから，1人ひとり散っていくわけで，どうしても独りよがりになってしまう部分がある。美術部も作業を始めてしまうと，口も開かず，ずっと切ったり描いたりしている。このように偏っていてはいけないから，体を動かすんです。ワークショップをやると，『こういうアプローチや表現があるのか』という発見があります。それに，舞台の条件もさまざまですから，それを知らないと絵の方向性が狂ってしまうこともありますからね」

舞台部以外の部門も身体表現ワークショップを行うことで，自分たちの作品をより深く知ることができるという。各部門の都合を優先した部分最適ではなく，劇団全体を考慮した全体最適を実現しようという意図も見える。

「チームにならないといけないしね。技量がウンとあればいいかっていうと，それだけじゃない部分があってね」

劇団かかし座は，チームになることを何よりも大切にしていた。

5．劇団かかし座の夢

後藤さんは，劇団員たちに常々このようなことを語っているという。

「君たちは，いまの“かかし座”が“かかし座”だと思っているだろうけれど，30年前の“かかし座”だって60年前の“かかし座”だって“かかし座”だし，5年後の“かかし座”だって10年後の“かかし座”だって“かかし座”なんだ。いまの“かかし座”がこうだからと判断されても，それは過去のことだから仕方がない。将来の“かかし座”を一緒に作っていける，一緒に夢を持てる，そういうふうにありたいね」

この言葉には，単なる未来志向だけではなく，これからの“かかし座”を作る権利もあるが，その責任も伴うという意味も含まれているだろう。だからこそ，夢が実現したときの喜びが大きくなる。劇団員にこのような意識づけを行うことで，やりがいや達成感を与えているのではないだろうか。この意識づけが，劇団かかし座の推進力になっていると感じた。

「今日の“かかし座”は昨日までの結果ではあるけれども，それは確定したことではないし，いつまでもチャレンジを続けていきたい」

今後の夢を語る後藤さんの口調に熱がこもる。

「“かかし座”の仕事を世界中の人たちに楽しんでいただくのが大きな夢です。2016年5月末に“UNIMA（国際人形劇連盟）”という世界的な人形劇の集まりがスペインで行われるんです。大きな海外舞台での公演は初めてですので，評価をいただきたいと思っています。世界から人が集まりますから，楽しみにしていますよ。世界の人たちに『面白いものがあるね』と思っていただける機会は，これからも積極的に作っていきたいです」

最後に，後藤さんは力を込めて語った。

「我々は実演の部分が大きいので，100年後に評価されてもあまり意味がないんです。いま，お客様に何を提供して喜んでいただくか，成り立たせていくかが大事なんですよ」

劇団かかし座は，いまを積み重ねることで，未来の限りない可能性に挑戦し続ける。

後藤　圭
（ごとう　けい）
劇団かかし座代表・演出家・プロデューサー。1955年東京に生まれ，14歳より横浜に住む。1979年父の逝去に伴い，劇団かかし座を継ぐ。TV放映用影絵映画，影絵劇などの影絵作品多数。玉川大学芸術学部講師などを務める。

梅津　勝明
（うめづ　かつあき）
1972年大阪府生まれ。大学卒業後，電機メーカーに勤務。退社後，テレビ番組の構成・リサーチ，映像作品のシナリオ執筆，ラジオ番組の企画・構成などに従事。2015年中小企業診断士登録。